信州大学博士課程教育リーディングプログラム

ファイバールネッサンスを先導する
グローバルリーダーの養成

外 部 評 価 報 告 書

（2022 年度）

目 次

1. 外部評価実施概要
　1.1　自己点検評価書による書面審査
　1.2　委員会評価参加者
　1.3　配布資料（一覧）

2. 事業評価シートによる委員の評価

3. 外部評価を受けて

4. 外部評価資料
　　事業評価シート（個人）

1. 外部評価実施概要

外部評価委員会日程およびプログラム

コロナ禍のため、以下のとおり書面での実施とした。

1.1 自己点検評価書による書面審査

2021 年(令和 3 年)および2022年(令和4年)の自己点検評価書に基づいた、評価シートへの記入

審査期間;2022 年 12 月 28 日(水)～2023 年 2 月 1 日(水)正午

評価シート提出期限;2023 年 2 月 1 日(水)正午

外部評価の内容:

① プログラム実施体制

② 学生の受け入れ状況

③ 教育内容および方法

④ 教育の質保証

1.2 委員会評価参加者

【外部評価委員】(敬称略)

田上 博道(経済産業省製造産業局生活製品課長)

富吉 賢一(日本化学繊維協会 専任副会長)

堤 理(炭素繊維協会 技術委員)

松下 正樹(日本不織布協会)

大塚 真二(一般社団法人日本染色協会)

松原 富夫(一般社団法人日本繊維技術士センター 理事・教育活動委員長)

岩田 忠久(一般社団法人繊維学会 副会長)

1.3 配布資料(一覧/各 1 部)

1. 外部評価委員会について
2. 外部評価委員会事業評価シート
3. 2021 年度リーディングプログラム自己点検評価書
4. 2022年度リーディングプログラム自己点検評価書
5. 【参考資料】2021 年度年次報告書

2. 事業評価シートによる委員の評価

書面での実施のため、2022 年 12 月 28 日に、全委員に本プラグラムの2021年と2022年の自己点検評価報告書および事業評価シート（個人）（資料参照）をメールおよび郵送で送付し、事業評価シート記入を依頼した。以下は各委員から提出のあった事業評価シートをまとめたものである。評価の対象期間は、前回の自己点検評価書発行後である 2021 年 4 月から 2022 年 12 月とし、委員には、A（非常に優れている）、B+（優れている）、B（普通）、B-（やや努力が必要）、C（非常に努力が必要）の 5 段階での評価をお願いした。各委員からの個別の評価を以下に記載する。

総合評価 【各委員の評価；B-・A・B+・B・B+・B・B+】

（1）プログラム実施体制［各委員の評価；B+・B+・B+・B+・B・B・B+］

本リーディングプログラムの運営組織が、成果目標に照らして適切なものであること。

観点 1 本リーディングプログラムの運営組織が、成果目標に掲げる人材輩出を実現するためにふさわしい実施体制となっているかどうか。

【委員の個人評価・コメント】

B+	2020 年からの資金変更の影響を鑑みても、新規学生の応募無いことは、学生にとって運営組織が妥当と評価されてないと感じた。大学としても、新プログラムへの移行を記載されており、現状維持以外の改善企画は確認できなかった。
B+	1. 2020 年から入学者無し、2022 年からは学生募集中止の状況下での運営体制の柔軟な変更は評価できる。 2. 但し、現行の実施体制が、プログラム発足時の成果目標達成に向けた体制だとは思えない。
B+	文部科学省の補助金終了後、皆様色々ご尽力頂き、お疲れ様でした。さて本プログラムの趣旨として海外でも活躍できる人材の育成であったかと理解しますが、その為には実際に海外に出て経験することも重要かと考えます。その観点からすると、コロナ禍の影響もあり、海外とのコンタクトが減少している様に見受けられること、少し残念です。
B+	様々な分野の専門家により多角的・多面的に教育を行える体制ができており、評価できる。メンター制度も導入されており、精神的なところでもサポート体制ができている。
B	本プロジェクトはこれまでに一定の成果を収めて、今後は他のプログラムへの発展的移行という形を取らざるを得ないと思う。そのため本プロジェクトの組織運営を評価することは困難である。

B	予算削減をカバーする体制整備を求めた外部評価委員の指摘に対して、プログラムに残っている学生の教育を継続する状況下、適切な体制を維持できていると評価。
B+	文部科学省の補助金事業終了後も、プログラム履修者数の減少等により一部運営体制が縮小されているものの、基本的な運営体制は維持されていることは評価できる。今後も運営に支障が生じないよう、基金への寄付や共同研究による資金獲得などに期待したい。

（2）学生の受け入れ状況［各委員の評価;B-・B+・B－・B-・B・B・B-］

履修生選抜の基本方針が明確に定められ、それに沿って、適切な学生の受入が実施されていること。

観点 2　優秀な学生を獲得するための広報活動が行われ、履修生選抜の基本方針に沿って適切な学生の受け入れが実施されているか。

【委員の個人評価・コメント】

B-	新規学生を募集していないので評価できない。 アドミッションポリシーの有無での自己評価は滑稽である。
B+	1. 本プログラムの履修生選抜基本方針は明確で、過去は適切な学生が入学してきた。 2. ただし、2020 年からの入学者が無い状況下では、コメント出来ない。
B－	文部科学省の補助金終了後、学生の募集継続が困難となったことは残念です。但し学内外の新たなプログラムに対し、今回の経験が少しでも生かされることを望みたいと思います。なお新たな基金の創設による学生のサポートについても、今後のプログラムの中で検討頂ければと考えます。
B-	これまでは適切な選抜および広報活動がなされてきた。しかし、文科省からの予算が打ち切られ、その後独自財源で進められており、その点については高く評価できるが、新規の学生を受け入れていないため評価が難しい。
B	本リーディングプログラムへの応募がないのは残念である。しかし履修生への奨励金がなくなり一方で経済援助の豊富な 2 つの博士プロジェクトが始まったという事実のインパクトが大きすぎるため評価するのは困難である。
B-	予算削減の中で、3年間、学生の受入れを止めているが、2年前の外部 評価委員の指摘を受けて「次世代高度人材『地域発志士』育成プログラム」へ発展的な移行を模索との対応策を示しており、一部学生が当該制度に採択された実績もあるが 、リーディングプログラムの成果をどのように移行させているのか、明確に示されていない点が残念。
B-	2020 年以降に新規学生の入学がなかった原因として、文科省補助金が終了して奨励金が無くなったこと、別の新たな奨励金がある博士プログラムが開始されているこ

	とをあげられているが、金銭的な支援が無くとも、学生にとって真に魅力的であり市場価値向上やキャリア形成につながるプログラムであれば入学があったのではないだろうか。改めて金銭的な理由以外での原因も分析していただき、その分析して得られた知見を新たな博士プログラムに反映していただきたい。

（3）教育内容および方法 ［各委員の評価；B-・A・B+・B・B+・B・B+］

教育内容およびその方法が成果目標に掲げる人材輩出を実現するためにふさわしいものであり、適切に行われていること。

観点 3-1 リーディングプログラムカリキュラムが適切なものであるかどうか。

【委員の個人評価・コメント】

B-	外部評価委員会、学生の意見で必須単位数を変更されたが、博士前期学生が居らず、その評価が不明である。今回の環境変化での見直し実績が不明であるのに、適切と判断されていることに対して志向の変更が必要。
A	2014 年のプログラム発足以来のカリキュラムは、プログラム発足時の理念を実現するに相応しいものと評価する。
A	ファイバーに関する知識を中心に、グローバルな活動をするためのカリキュラムが組まれていると考えられます。
B	新規修士の学生を受け入れていないため、修士課程における教育はないため、博士課程の学生のみに限ると、講義科目が非常に少ないが、適切に行われていると判断できる。
B+	本プログラムの「幅広い知識と深い専門知識を有するグローバルリーダーの養成」という目的に対して十分に適切なカリキュラムになっている。
B	外部評価委員の指摘を受けて必要単位数の削減を行う等適切に対応している。
B+	ファイバー工学に関する基礎実習や専攻科目、産業界と連携し実践力を養成するインターンシップなど、カリキュラムは適切であると考える。

観点 3-2 カリキュラムが適切に実施されているかどうか。

【委員の個人評価・コメント】

B	開講された 4 科目中 2 科目で対面・オンライン両方で実施されたのは環境変化対応として評価できるが、海外特別実習が国内、オンラインで実施されたことは残念。海外オンラインが実施できなかった理由も不明。定量的な評価メジャーによる自己評価が必要と考える。

B+	在籍学生の減少・実施体制簡素化・コロナ感染症拡大の中で、カリキュラムが当初の計画通り実施されているとは言い難い。
B	工場研修やインターンシップなどの魅力的なプルグラムが有ったが、コロナ禍の影響もあり、オンラインによる研修に変更されたことは残念である。
B	博士課程の学生に対する講義科目が少ないが適切に実施されている。
B+	新型コロナウイルス感染対策および在籍学生が博士後期課程の学生のみという非常にイレギュラーな状況下ではあるが対策を講じながら適切に実施されたと判断する。
B	ウィズコロナという環境変化を受けて、オンラインと対面を組わせて適切に実施されているものと評価。 コロナ前と比較すると、海外講師による特別講義などの機会が減っているが、学生数の減少も背景にあると思料するが、オンライン講義が一般化する中、開催の工夫の余地があったのではないか。
B+	新型コロナウイルス感染症対策によりプログラムの実施に一部制約もある中でも、オンラインの活用などによりカリキュラムが適切に実施されたと考える。

観点 3-3 学生が常に自己評価を行いながらプログラム目標を実現できるシステムとなっているかどうか。

【委員の個人評価・コメント】

B-	定期的な自己評価システムは秀逸ながら、特に TOEIC の目標未達者が出ているのは、大学独自判定によるノルマ軽減の悪影響とも映る。また、一律的に 1 年評価ではなく、学生によって、必要な時期に、例えば半年での指導の必要性を判断すべきではないだろうか。
A	学生たち自身が、自己評価を通じてプログラムを達成するシステムとなっていると判断する。
B+	自己評価シートの活用によるメンターとのコミュニケーションが図られており、うまく運営されていたと思われます。この結果は TOEIC スコア等にも表れており、有効な活動であったと評価します。
B+	学生からのアンケートを見ても、自身で考え、精力的に研究にも取り組んでいることが読み取れるため、プログラムは適切に実行されていると思われる。
A	年 3 回の自己評価シートに基づくメンター教員と主指導教員の助言、支援は十分に機能している。
B+	明確な自己評価システムがあり、担当教員だけでなくメンターが、オンラインによるものも含めて面談により 、目標達成に向けた支援を行うシステムが確立している点は評価。
B	学生は年に3回、自己評価シートを記入し、これをもとにメンター教員と指導教員が達

	成状況を把握し、目標達成に必要な事項をフィードバックするなど指導に活せる体制となっている。

観点 3-4 教育研究環境が適切なものとなっているかどうか。

【委員の個人評価・コメント】

B-	この観点に関する資料添付、2020 年以降の工場研修の実績もない。 評価対象がみあたらず。
A	大学の教官陣および事務方の配慮と努力で、ハード＆ソフトの環境が整備されている。
B+	教育研究に必要な設備の充実が継続的に図られているとのことであり、適切なものであると判断します。
B+	様々な分野の教員がいるとともに、繊維に関する様々な装置があることから、教育研究環境は適切である。
B+	研究に必要な装置や設備に対する継続的な整備の実施により教育研究環境は適切だと判断する。さらに異国で困難を強いられる留学生へのきめ細やかな環境整備は評価に値する
B	適切な研究環境が用意されているものと思料。
B	所属する研究室を中心に実験研究環境は整備されており、また、年に数回、メンター教員とのオンラインも含む面談も実施されるなど、ハード面・ソフト面で特に問題はないと考える。

観点 3-5 学生への支援体制が適切に行われているかどうか。

【委員の個人評価・コメント】

B-	授業料の免除、メンター面談のみでプログラムとしては評価できない。
A	1. 物心両面の支援体制はプログラム発足以来、適切に実施されてきたと評価する。 2. 残留在籍者への継続的な支援を期待する。
B	文部科学省の補助金終了後、どうしてもサポートが手薄となる傾向にあり、コロナ禍も相まって、一部実施出来なかったサポートもあると認識しています。
B	採択されている学生に対しては支援体制はよくできている。研究の面だけでなく、精神的なサポートをするメンター制も導入していることから支援体制はよくできている。しかし、アンケートにおいて、一部の修士学生から意見があったので、検討することが望ましい。
B	研究活動に対する教育的な支援は十分であるが、経済的な支援が不十分だと感じた。
B	プログラム予算が減少する中、奨励金、授業料の減免などの財政支援措置はある程度

	継続している点は評価。
B+	文部科学省の補助金終了後の予算減少に伴い中止・縮小された支援もあるが、継続している学生に対する奨学金をはじめとする財政支援や就職支援などは評価できる。引き続き、効果的な就職支援などを期待したい。

観点 3-6 学生が満足するプログラムとなっているかどうか。

【委員の個人評価・コメント】

B-	学生アンケート実施状況、結果も記載なく評価できず。
A	在籍学生＆修了学生のアンケートから彼らのプログラムへの満足感が伺え、プログラム発足時の理念が実現されていると評価する。
B+	メンターとの面談や運営委員会幹部との意見交換会が継続されており、そこで上がった問題点が継続的に解決されているとのこと。このことはアンケート調査にも反映されており、満足できるプログラムになっていると思われます。
A	アンケートを見ると、学生から非常に高く評価され、満足度が高いことが理解できる。特に、91.7%の学生が後輩にこのプログラムを勧めたいと思っていることは素晴らしい。
B+	学生アンケート調査に基づき毎年改善されてプログラム自体の満足度は向上している。
B	自己評価の通り。
B+	2021 年度に実施された学生へのアンケート調査によれば、プログラムへの満足度は非常に高いものとなっており評価できる。

（4）教育の質保証 ［各委員の評価；B-・A・B+・B+・B+・B+・B+］

教育の質の保証が適切であること。

観点 4-1 学位授与の基準が適切であるかどうか。

【委員の個人評価・コメント】

B-	TOEIC に関しては、英語が母国語又は通常使用の学生には不要で、例えば、日本語能力を追加する等の修正が必要である。またプログラム独自の認定試験に一定数の落伍者を設けて、安易な単位取得措置にならないような配慮も必要と感じた。
A	学位基準を達成した 26 名の修了生が、①第一級の企業や大学で活躍、②修了生の高い満足感、③受け入れ企業側の高評価に接し、本プログラムの学位基準は適切と判断する。
B+	通常の学位授与基準（論文数）を満たす事のみならず、TOEIC スコア 800 相当の英語力というグローバルを意識した基準があり、これらは本プログラムに対して適切なものであると考えます。

B+	適切である。
B+	学位授与の基準が通常の博士課程＋αとなっており十分に適切であると思われる。
B+	学位授与基準は、履修生が社会に出て活躍し、受入企業の評価も高いことから、研究者としての能力を適切に示しているものと評価できる。
B+	通常の博士課程における基準（論文数）に加えて、TOEIC800 点相当の英語力や能力審査を条件とするなど、グローバル人材の育成に相応しい内容であると評価できる。

観点 4-2 質の保証の基準が社会のニーズに照らして適切かどうか。

【委員の個人評価・コメント】

B-	観点に沿った基準、評価対象の記載が無いので評価できず。
A	1. 社会のニーズは、①外部評価委員の声、②修了生の声、③修了生受け入れ企業の声、④外部企業との濃密なコミニュケーションを通じて、十分に把握されている。 2. 特に企業側の修了生への高評価が、プログラムの社会ニーズを代弁している。
B	定期的な質保証の見直しがなされている点、並びにインターンシップの依頼やカリキュラム等への希望調査などを通じて修了生の質保証に反映する様努力してきたとのことであり、適切な活動と考えます。但しさらに積極的な接点を持つことで、より一層のニーズ確認を進めて頂ければと思います。
B+	企業からのアンケートを見ると、回答は 3 社からではあるが、非常に高く評価されているため、社会のニーズに合っていると思われる。
B+	時代のニーズに合ったグローバルリーダーを養成しており質の保証は適切である。
A	履修生に対する受入企業の評価が総じて高いことから、社会のニーズのマッチした人材育成制度として機能しているものと評価。
B+	産学連携委員による企業関係者へのヒアリングや外部評価委員会など、社会ニーズが反映できる仕組みになっており、質の保証の基準に反映できていると考える。

観点 4-3 Qualifying Examination の内容が適切であるかまた適切に実施されているかどうか。

【委員の個人評価・コメント】

B-	資料、実施対象も無く評価できない。
評価なし	2021 年度から対象学生が居ないことにより、QEの内容＆実施状況の評価は出来ない。

B+	Quality Examination の内容について、特にグローバルリーダーとの観点からリーダーシップに関する質問を加えた点は評価出来ると思います。但しプログラムの終了に伴い、2021 年度以降は実施されていないとのこと、残念ですが、この様な活動を他のプログラムへ展開することもご検討頂ければと思います。
評価なし	M2 がいないので評価できない。
B	対象となる修士学生がいないため実施されておらず評価できない。
B+	修士課程における新規学生の受け入れを停止しているため、適切かどうか評価できないが、履修生の社会における活躍を見る限り、適切な学生を選定して、適切な教育が行われたものと考えられる。
B	2021 年度以降対象となる修士学生がおらず QE は実施されていない。

観点 4-4 Systematic Review の内容が適切であるかまた適切に実施されているかどうか。

【委員の個人評価・コメント】

B-	資料、実施対象も無く評価できない。
評価なし	2021 年度から対象学生が居ないことにより、SR の内容＆実施状況の評価は出来ない。
B	Systematic Review については適切に実施されてると考えます。
評価なし	M2 がいないので評価できない。
B	対象となる修士学生がいないため実施されておらず評価できない。
B+	修士課程における新規学生の受け入れを停止しているため、適切かどうか評価できないが、履修生の社会における活躍を見る限り、適切な学生を選定して、適切な教育が行われたものと考えられる。
B	2021 年度以降対象となる修士学生がおらず SR は実施されていない。

観点 4-5 十分な学生の研究成果が得られているかどうか。

【委員の個人評価・コメント】

B-	2022 年に寄稿した実績が少なく、学生数、レベルの低下が感じられた。
A	2016 年から 2021 年までの学生達の論文発表数（144 件：3.3 件/人）、受賞数、学生たちのアンケート結果および受け入れ企業のコメントから研究成果の高さを確認できる。

B	博士課程の学生数増加に従い、論文発表数、受賞数が増加しているとのことであり、着実に学生の研究成果が得られていると思います。但し本プログラムの目標であるグローバルリーダーとの観点から、海外での口頭発表等の観点も加えられたらと考えます。
B+	発表論文から十分に成果が出ていると判断できる。
B+	十分な研究成果は得られている。
B+	通常の学生より多くのコースワークがある中、英文論文を中心に多くの論文を出しており、十分な研究成果は得られているものと思料。
B	博士課程の学生が増えたことに伴い、論文発表数も増えているとのことである。個々の研究や論文の評価詳細は不明であるが、活動量は適切であると考えられる。

観点 4-6 就職先で学生が十分活躍しているかどうか。

【委員の個人評価・コメント】

B+	入社 1，2 年人材としては評価されているように見受けられたが、カリキュラムの特徴の発揮は未明。通常の修士、博士過程修了者との差別評価ポイントの明確化、同様の評価を行い、比較するのが妥当と感じた。
A	受け入れ企業の声から、リーデイングプログラム修了生が従来の博士課程修了者とは異なる評価（専門性、グローバル感、自己解決力、課題設定力、コミニュケーション力の高さ）を得ていることが十分に感じ取れる
B+	修了生の就職先企業からのコメントでは、社会人としての基本的なスキル並びに英語を含むコミュニケーション能力がポイントとして見られている様であるが、その様な観点からは十分活躍していると思われます。
B+	企業からのアンケート結果を見ると十分に活躍され、評価されている。
B+	アンケート結果から十分に活躍していると判断できる。特に語学力と俯瞰的に物事を考えられる力を評価されておりニーズに合ったグローバル人材を輩出している。
A	履修生に対する受入企業の評価が総じて高く、過半の企業が期待以上と評価。アンケートに応じた企業が全部今後も履修生を受け入れたいと評価していることから、就職先で学生は 当初想定を 大きく上回って 活躍しているものと評価。
B+	プログラム修了生は、東レや花王、住友化学といった繊維・化学企業の研究所に就職しており、専門性を活かすことが期待される。就職先への追跡調査でも、コミュニケーション能力の高さや、専門分野以外にも柔軟に対応できる教養など高い評価をいただいており、プログラムでの様々な経験に培った能力が就職先でも発揮されているとうかがえる。

（5）所見、その他

初めての部委員会評価であり、過去の実績等は知らない状況での評価となった。
今回、非実施の活動も多く、体制の評価や、改善点の提案は資料でのみ評価した。
評価項目に関しては、年後内での対象・非対象を項目ごとに選択し、対象評価項目のみを協議すべきと考えます。
また、せっかく日本で教育を受けられるのだから、“日本品質”、“日本語”といった特徴ある国際人となれるようなプログラムも選択できれば、今後、日本と海外を繋ぐ人材としてご活躍頂けるのではと期待します。

1. プログラム発足時の理念（ファイバールネッサンスを先導するグローバルリーダーの養成）の高さ・理想・先進性が極めて印象深い。
2. 学生達の中間発表会、外部評価委員会等への参画を通じて、教官陣・事務方および学生たちの本プログラムへ関係することの高揚感・満足感が印象的であった。

3. それは、今までの博士課程プログラムとは隔絶して、新しい人材を輩出する意気込みを関係者全員から実感したからである。
4. ただし、本プログラムが発足 10 年あまりで中止されるのは誠に残念である。先進的な教育プログラムの成果は長期的視野＆長期的尺度で判断されるべきである。
5. 本プログラムの実質的な評価は、社会での活躍が始まったばかりの修了生の今後の実績で決まる。
6. プログラム発足時の高揚感・その後に続く充実感・そして現在の達成感が、現下のプログラム終了の失望感で幕を下ろすの誠に残念である。
7. リーディングプログラムの理念・KH・成果が、どのような形で新規博士プログラムへ繋がっていくかが不鮮明だけに、漠然とした喪失感を感じる。望むらくは、リーディングの理念が継承・継続していくことを期待する。
8. 欧米や中国の大学で、研究開発・教育システムが近年、急速に質＆量的に充実しつつあることを聞き及ぶにつけ、本プログラムへの期待は膨らんでいた。
9. 最後に、新規プログランへグローバルプログラムの理念が引き継がれることを強く要望する。

今回は学生さんとの直接的なコンタクトが出来ず、残念でした。

学生との意見交換を行っていないので、コメントは致しません。
全体を通して、財源の問題のため新規の学生を採択していないが、現在在籍している博士課程の学生に対しては、これまで通り研究・教育の両面でしっかり取り組みがなされている。また、メンター制も継続しており、新型コロナで精神的に不安定になる学生もいるが、良くケアされていると思われる。研究論文もしっかり出ており、プログラムとしてはよく走っていると思われる。
自己評価結果と学生、卒業生のアンケート結果は高い精度で整合性が保たれていることから、本リーディングプロジェクトは真摯に運営され目的に沿って正常に機能していると判断できます。さらには多くの優秀な学生の育成により十分な社会貢献をしていただいていることに感謝いたします。
　しかしながら経済的な観点から本リーディングプロジェクトが危機的な状況にあるのは非常に残念です。国内において最高学府である大学における繊維に特化したプロジェクトは唯一無二であり、また一定以上の役割を果たしていることはもっと評価されるべきだと考えます。
　繊維を生業とする企業側としてプロジェクトのより一層の発展を期待しておりますので、困難な課題が多いとは思いますが今後どのような形で継続していくのか慎重に議論を重ねていただき引き続き高度な人材育成に努めていただきたいです。
　国内の繊維産業は縮小しサプライチェーンの存続さえ危ぶまれる業種もありますが、この難局を乗り越えるためにも繊維に通じた優秀な学生さんを多数輩出していただけることを願っております。

	卒業生を受け入れた企業の評価は高く、期待以上との評価が過半を占めており、社会ニーズにマッチした人材育成プログラムとしては所期の目的を達成したものと考えられる。プログラムを完了する時期が近付き、新規学生募集を停止しているため、2021年度、2022年度という単年度評価は難しい状況。2014年以降のプログラム全体の評価を行うとともに、プログラムで得られた知見を、繊維学部だけでなく広く学内の他のプログラムにどのように生かしていくか、を整理する時期に来ている。あと2年程度で全履修生が卒業する状況となるため、来年度には、こうした成果を記録にとどめるのみならず、成功要因（あるいは課題）を整理し、今後の教育プログラムに応用する方向性を示していただきたい。なお、国際的な人材育成の成果について、帰国した留学生の活躍をフォローしていただければ制度の評価がより正確になるのではないか。 なし

3. 外部評価を受けて

2022 年度外部評価を受けて

プログラムコーディネーター　森川　英明

2022 年度の外部評価委員会（書面により実施）では、委員から、プログラム発足時には「今までの博士課程プログラムとは隔絶して、新しい人材を輩出する意気込みを関係者全員から実感した」が、「プログラム発足時の高揚感・その後に続く充実感・そして現在の達成感が、現下のプログラム終了の失望感で幕を下ろすのは誠に残念である」、「経済的な観点から本リーディングプロジェクトが危機的な状況にあるのは非常に残念です。国内において最高学府である大学における繊維に特化したプロジェクトは唯一無二であり、また一定以上の役割を果たしていることはもっと評価されるべきだと考えます」などプログラムが終了することを惜しむ意見をいただいた。また、評価のための添付資料が不足していたことや対面での説明ができなかったため、「評価項目に関しては、年後内での対象・非対象を項目ごとに選択し、対象評価項目のみを協議すべきと考えます」という意見もあった。資料および説明不足により評価委員の皆様にご迷惑をおかけしてしまった。

これまで、第1回外部評価委員会を2015年度に開催して以来、文部科学省の補助金終了年の2020年度まで毎年開催し、その後、隔年開催となり本年度に第8回の外部評価委員会が実施された次第である。この間、第6回（2019年度）までは学生の中間発表会と合わせて2日間に渡る対面での評価委員会形式であった。そのため、委員には学生との意見交換も行っていただいた。しかし、残念ながらコロナ蔓延の影響を受けて第7回委員会（2020年度）は書面での実施となり、今回の第8回委員会も書面となってしまった。

この間、外部評価委員の皆様には信州大学リーディングプログラムの実施と改善に多大な貢献をいただき感謝する。皆様の意見を基に改善した点には、（1）特定の国に偏らない幅広い国からの留学生の受け入れ、（2）企業経営者による講義の実施、（3）企業人メンター制度、（4）留学生に対するプログラム独自の日本語教育、（5）在学生と若い博士保持者との懇談、（6）学生に対するアンケート調査の実施と公表、（7）就職者の追跡調査などがあげられる。こうしてプログラムが目標とする新しいタイプの博士人材養成に取り組んだ結果、日本学術委員会のプログラム事後評価で A という高い評価を得ることができた。

リーディングプログラムの学生募集は2022年度で終了し、在学している学生がプログラムを修了した時点でその役目を終えるが、これまで評価委員からいただいた意見や本プログラムで得られた成果は信州大学の新しい博士プログラムへと引き継がれている。

4．外部評価資料
事業評価シート（個人）

信州大学博士課程教育リーディングプログラム
2022 年度外部評価委員会

事業評価シート（個人）

対象期間：2021 年 4 月～2022 年 12 月

◎総 合 評 価

［ アイテムを選択してください。 ］

A（非常に優れている）・B^{+}（優れている）・ B（普通）・B^{-}（やや努力が必要）・C（非常に努力が必要）

〇評価項目

1．プログラム実施体制 ［ アイテムを選択してください。 ］

本リーディングプログラムの運営組織が、成果目標に照らして適切なものであること。

観点 1 本リーディングプログラムの運営組織が、成果目標に掲げる人材輩出を実現するためにふさわしい実施体制となっているかどうか。
［ アイテムを選択してください。 ］

【コメント】
ここをクリックまたはタップしてテキストを入力してください。

2．学生の受入れ状況 ［ アイテムを選択してください。 ］

履修生選抜の基本方針が明確に定められ、それに沿って、適切な学生の受入が実施されていること。

観点 2 優秀な学生を獲得するための広報活動が行われ、履修生選抜の基本方針に沿って適切な学生の受け入れが実施されているか。
［ アイテムを選択してください。 ］

【コメント】
ここをクリックまたはタップしてテキストを入力してください。

3．教育内容および方法

[アイテムを選択してください。]

教育内容およびその方法が成果目標に掲げる人材輩出を実現するためにふさわしいものであり、適切に行われていること。

観点 3-1 リーディングプログラムカリキュラムが適切なものであるかどうか。

[アイテムを選択してください。]

【コメント】
ここをクリックまたはタップしてテキストを入力してください。

観点 3-2 カリキュラムが適切に実施されているかどうか。

[アイテムを選択してください。]

【コメント】
ここをクリックまたはタップしてテキストを入力してください。

観点 3-3 学生が常に自己評価を行いながらプログラム目標を実現できるシステムとなっているかどうか。

[アイテムを選択してください。]

【コメント】
ここをクリックまたはタップしてテキストを入力してください。

観点 3-4 教育研究環境が適切なものとなっているかどうか。

[アイテムを選択してください。]

【コメント】
ここをクリックまたはタップしてテキストを入力してください。

観点 3-5 学生への支援体制が適切に行われているかどうか。

[アイテムを選択してください。]

【コメント】
ここをクリックまたはタップしてテキストを入力してください。

観点 3-6 学生が満足するプログラムとなっているかどうか。

[アイテムを選択してください。]

【コメント】
ここをクリックまたはタップしてテキストを入力してください。

4. 教育の質保証

[アイテムを選択してください。]

教育の質の保証が適切であること。

観点 4-1 学位授与の基準が適切であるかどうか。

[アイテムを選択してください。]

【コメント】
ここをクリックまたはタップしてテキストを入力してください。

観点 4-2 質の保証の基準が社会のニーズに照らして適切かどうか。

[アイテムを選択してください。]

【コメント】
ここをクリックまたはタップしてテキストを入力してください。

観点 4-3 Qualifying Examination の内容が適切であるかまた適切に実施されているかどうか。

[アイテムを選択してください。]

【コメント】
ここをクリックまたはタップしてテキストを入力してください。

観点 4-4 Systematic Review の内容が適切であるかまた適切に実施されているかどうか。

[アイテムを選択してください。]

【コメント】
ここをクリックまたはタップしてテキストを入力してください。

観点 4-5 十分な学生の研究成果が得られているかどうか。

[アイテムを選択してください。]

【コメント】
ここをクリックまたはタップしてテキストを入力してください。

観点 4-6 就職先で学生が十分活躍しているかどうか。

[アイテムを選択してください。]

【コメント】
ここをクリックまたはタップしてテキストを入力してください。

○学生との意見交換に対する所見、その他

【コメント】

ここをクリックまたはタップしてテキストを入力してください。

記入者

氏　名